

## 2016年の半減期での精度が気になります（2020年5月20日）

---

### ご質問：

先日、HashFinderのサブスクを申し込ませて頂きました。

さっそく使わせて頂いておりますが、一つ気になることとして、このツールは単純にハッシュレートだけを見るのではなく、他の要素も計算しているものだと思います。

そこに「半減期」に対する考慮も含まれているのでしょうか？

ざっと見たところ2018年以降はかなりの確立で方向性を当ててきておりますが、2016年の半減期付近は今と比べると若干精度に欠けている印象です。

今回も半減期を迎えており、ロジック的な部分での修正などは加えられているのか気になった次第です。

以上、お手すきの際にご返答頂けると幸いです。

---

### ご回答：

ご質問を頂きまして、ありがとうございます。

半減期に関してですが、こちらはシグナルの計算式には含めておりません。

以下は理由です。

半減期でマイナーの報酬は1/2になり、そのため直後から採掘の採算分岐点であるBTCUSD価格は2倍となります。

※ 半減期前後の採算分岐点は、TradingViewの無料インジであるMaison（V1.8以降）で確認出来ます

半減期を迎えた後、ハッシュレート／価格の推移は以下のようになります。

- ① ビットコインの市場価格が採掘原価レベルに合わせるため2倍へと向かう
- ② ハッシュレートが採算分岐点に合わせるため1/2へと向かう

現実的には①②の間で、価格とハッシュレートが均衡するポイントを市場が探していくこととなります。

2020年5月12日の半減期から20日現在で起こっていることも同じで、値段の切り上がり×ハッシュレートの切り下がり両方が起こっています。

この中でHashFinderが掘り所とするハッシュレートの動きを整理すると、、、

- 半減期を迎える
- 採掘原価が2倍になる
- マイニングが採算に合わなくなる
- 体力のないマイナーから採掘を止めていく
- 市場価格と均衡するまでハッシュレート／難易度は下がり続ける
- 均衡後ハッシュレートは再び上昇傾向に戻す

半減期のインパクトを市場が織り込む過程でハッシュレートは下押しし、それが価格上昇を妨げる要因の1つとなります。

ですからハッシュレートを参照している時点で、半減期のインパクトを追跡しているのご理解をいただければ宜しいかと思えます。

あとは「2016年の半減期付近は今と比べると若干精度に欠けている印象です」という点に関しまして。

こちらはコース案内のページにも記載をさせて頂いております、以下のポイントを参照頂ければと存じます。

#### 適していないこと④：バブル相場での売りポイント

マーケットは**参加者の質によって変わります**。

価格が急上昇を始め、ビットコインも相場も触ったことがない人たちが押し寄せるような環境では、**理論も何も消し飛びます**。

そのような環境では「Sell」のシグナルが出続けても値段は上がり続けることとなります。

これは**当ツールが前提としている「論理的な市場参加者の方が多数を占めている」市場では無くなってしまっているから**です。

つまり「バブル的な上昇相場を全部取った上で天井でサインを出す」ということは得意としておりません。

#### 適していること①：成熟した市場での売買

当ツールは**市場参加者が理論的に売買の判断をする環境で力を発揮**します。

採掘されたコインを売却するマイナーと、その反対側に立ってリスクを引き受ける投機家。さらに市場間のかい離を埋めるアービトラージャー。

これらのプレイヤーがバランス良く機能した**成熟市場では、論理が市場を支配**します。

こうした環境において、『ハッシュファインダー』は**最大の威力を発揮**します。

2016年のビットコイン市場は、今と比べると絶望的なほど荒い環境でした。

CMEの先物は存在しない。オプション市場も皆無。アルトコインはバブル。採掘は儲かり過ぎてクラウドマイニングが流行するという状況です。

例えばMaisonを使ってS9マシンの採掘原価レベルの目安を描画したのが下のチャートです。



2016年の半減期直後に投下されたS9ですが、その時点では余裕過ぎるほどの利益性をたたき出しています。

※ 今は完全に採算を割れるレベルに到達をしている状況

これはビットコインに限らず他のアセットでも共通することですが、原価レベルと市場価格とがかけ離れている場合、反応は「緩く」なります。

ハッシュレートを値動きの先行指標として使うのに適した環境というのは、市場価格が原価レベルと接近戦を戦っているような状況です。

なぜならビットコインの市場価格が採掘原価の「4倍」などという余裕の状況であれば、ビットコインの値段が40%下がろうが、マシンを止める選択肢などあり得ない訳です。

ところが市場価格が採掘原価と±20パーセントの間に位置しているのであれば、ビットコイン40%の下落は採掘停止を余儀なくされます。

2020年、今の市場環境はマイナーも上手く価格変動リスクをヘッジ出来るところしか残らず、また投機側もロジックに基づいた売買をする参加者のみが生き残っている状況です。

これこそ、2016年ころは“「Sell」のシグナルが出続けても値段は上がり続ける”事象が確認されていた理由と考えて頂ければ、宜しいかと思えます。

どのようなシグナル・ツール・分析手法も、市況が変われば役立たずになるのも事実です。

市場環境に合った考え方・ツール・取引の方法・リスク管理を選び続けることこそ、私たち投資家が生き残るために必要とされる能力なのでしょう。

以上、参考にして頂ければ幸いです。